

第8章 付編（Ⅰ）

近世における岡藩家臣団と武家屋敷 —本調査地域を中心として—

佐藤 晃 洋

はじめに —城下町竹田の概観—

天明3年（1783）に豊後竹田を訪れた貝原益軒は、その著『西遊雑記』において、岡城と城下町竹田を次のように描写している。

六月朔日、岡に至る。岡の城は、かねて聞およひしより嶮城にして、眼を驚せしなり。海内三嶮城の最上と稱せるもむべなり。……町は大概よき町にして、諸品自由の地なり。是は四五里の間商町一ヶ所もなき事にて、万事此城下ならでは調ひがたき故に、何に不足なきやうに商人のたくはへ置と見へたり。寺院も数多見へ侍りぬ。

このような印象を貝原益軒に与えた城下町竹田の形成について、「金城秘鑑 勇」（大分県立図書館所蔵）には次のように述べている。

右御討入之砌ハ竹田町並ノ所、無田ニテ民ノ家少々有之候處、町割御坐候テ、町家出来之處、玉来町ヨリ本町へ五拾三間御移シ……。

城下町竹田は、水田であつた所に作られ、玉来町などからの住民移住があり、さらに町人町として整備されたのは17世紀半ば頃であろう。

このような町人町の周辺及び岡城周辺に土地を切り開き、武家屋敷が配置されることになるわけだが、諸士屋敷間取りなどは文禄4年（1595）に柴山両賀を堺から呼び寄せて担当させている（北村清士編『中川史料集』新人物往来社、1969）。

さて、このような城下町竹田については、成立・支配・商業活動などを中心に『大分県史 近世篇Ⅰ』（大分県、1983）、『竹田市史・中』（竹田市、1984）や各種発掘調査報告書をはじめ、さまざまな研究成果が蓄積されている。また、岡藩家臣団に関連した研究も、上記以外に、朝尾直弘・佐々木丞平・豊田寛三編『三宅山御鹿狩絵巻』（京都大学学術出版会、1994）、菅原憲二『豊後岡藩中川家文書の研究—豊後岡藩中川家文書目録—』（1994）、熊谷光子「近世大名下級家臣団の構造的分析—豊後岡藩を素材として—」（『日本史研究』316）など、さまざまな視点から成果が蓄えられている。本稿では、これらの研究成果を手がかりに、本調査地域を中心として、岡藩家臣団と近世における城下町竹田の武家屋敷について考察することを課題としたい。

1. 岡藩における家臣団の形成

① 中川氏の岡入部

中川氏が豊後国岡に入部するに至る経過を「金城秘鑑 勇」（大分県立図書館所蔵）からみてみよう。

- 一 清秀公ハ、摂州茨木御居城之節、御領地ハ……七万石程アリ。
- 一 秀政公、天正十三酉年、播州三木城へ御所替。文禄年中、於朝鮮国御討死。
- 一 秀成公、御家督、文禄三年午正月廿五日迄御在城也。
- 一 秀成公、文禄三甲午年二月、豊後国岡城へ御討入。

中川瀬兵衛尉清秀は、中川氏の太祖とされている人物である。『寛政重修諸家譜』には、天文11年（1542）に中川佐渡守重清の嫡男として山城国（摂津国とする説もある）で生まれたとされている。元龜3年（1572）に摂津国の茨木城主となり、天正6年（1578）から織田信長の家臣となり、各地を転戦している。信長の死後は、羽柴秀吉に味方し活躍するが、天正11年（1583）、賤ヶ岳の戦いで戦死した。

清秀の嫡子であり、信長の娘鶴姫と結婚していた中川右衛門大夫秀政は、豊臣秀吉から清秀の遺領を安堵され、天正13年（1585）に播磨国の三木城主となる。しかし、文禄元年（1592）、朝鮮に出兵中に戦死した。

秀政の名跡は、弟の中川修理大夫秀成が相続することになった。秀成は、文禄2年（1593）、次のような秀吉の知行宛行状により、豊後国岡に領地替えされることになる。

豊後国直入郡貳万九千参拾八石、同大野郡内参万六千九百六拾貳石、都合六万六千石事、令扶助畢、全可領知、此内壹万六千石無役、以五万石軍役可相懇候也。

文禄貳

十一月十九日 （秀吉朱印）

中川小兵衛とのへ

（神戸大学文学部日本史研究室編『中川家文書』臨川書店、1987）

文禄3年（1594）正月25日、秀成は三木城を出立し、坂越（兵庫県）から船で速見郡小浦（日出町）まで渡り、2月13日、岡に到着している。そして、秀成は志賀親善の旧城である岡城に入り、領内統治とともに城の拡張工事や城下町の建設に取り掛かったのである。その後、領知は加増や交換があり、朱印高7万石となっている。こうして秀成を初代藩主とする岡藩は、12代久昭・13代久成の時に明治維新を迎えるまで続いている（第1表）。

② 家臣団の形成と岡藩の職制

ところで秀成が岡に入ってきた時には、どのような家臣団を率いていたのであろうか。「金城秘鑑 智」（大分県立図書館所蔵）は、「秀成、摂州茨木・播州三木ヨリ豊州岡之城入部迄分」として上級家臣141騎、知行高46,690石余と記している（第2表）。秀吉が知行宛行状とともに、岡への転封に際して逐電する者があれば成敗することを命じた朱印状を与えていることから、本来の家臣団はもっと規模が大きかったことが推測される。そして「金城秘鑑 智」は、その後に召し抱えた上級家臣を「右之以後、知行出ル高」として36騎、知行高7,660石と記している（第2表）。上級家臣合計177騎、総知行高54,350石余となる。これに伴い、下級家臣団も整備されたであろう。朱印高に見合う家臣団を構成するために岡において新規召し抱えが行われ、ほぼ必要数を確保した姿がこの数字だといえるであろう。そして、慶長2年（1597）、秀成は1,500人を率いて朝鮮へ出兵している（『中川家文書』）。さらにこの後、家臣団は拡充され、2代久盛の時、正保4年（1647）の肥前国唐津城受け取りに際しては、上級家臣250騎、その他3,000余人を率いている（「金城秘鑑 智」）。

岡藩における家臣団拡充の状況を、上級家臣を中心に「諸士系譜新古次第」・「岡藩中川家中武鑑」（ともに中川家所蔵）からみてみよう（第3表）。「諸士系譜新古次第」は「諸士系譜」とともに寛政5年（1793）の編纂（これ以降の書き足しや書き換えもある）、「岡藩中川家中武鑑」は文政7年（1824）の編纂で、どちらも天明末年頃の藩内の序列編成によって撰定されたものであった（菅原憲二『豊後岡藩中川家文書の研究－豊後岡藩中川家文書目録－』）。この序列は、知行高や役職とは別で、中川家の当主と主従関係を結んだ時点を基準とし、藩内での格式を示したものである。

第3表のNoは、「諸士系譜新古次第」に記されている順番（書き換えがある場合は書き換え後の順番）に並べたものである。1～390が「諸士系譜新古次第」に記載されている家臣であり、391は「諸士系譜新古次第」には見えないが「岡藩中川家中武鑑」には記載されている家臣である。諸士Noは、「諸士系譜」の巻数とそれの中の順番を示している。「諸士系譜新古次第」及び「諸士系譜」は成立当初第99巻までの記載であったが、その後第104巻まで追加されている。原則として各巻毎に中川家との関係が同等の家臣をまとめて編集している。備考欄は、「諸士系譜新古次第」に成立後に書き込まれた記述で、天明末年以降の家臣の断絶・身分下降などを記載している。そして、「諸士系譜新古次第」の家臣にあわせて「岡藩中川家中武鑑」に記載されている家臣と編纂当時の格・職、知行高などを並べている。約30年間という編纂の時間差により、当主が代替わりしている家もあれば、何らかの理由で岡藩を離れ記載がなくなっている者もいる。

さて、第3表から岡藩の家臣が、いつごろ中川家の当主と主従関係を結んだかということを見ていくと、秀成が岡に入部する以前に家臣となった家が155家となる。前述の「金城秘鑑 智」に記載されている家臣の数と一致しないが、「諸士系譜新古次第」では入部後に分家した家も一家として数えているための誤差と考えられる。そして、秀成時代に17家、久盛時代に36家、久清時代に29家、久恒時代に69家、久通時代に10家、久忠時代に23家、久慶との関係で4家、久貞との関係で31家、久持時代に4家、久貴時代に7家が家臣となっている（この他に岡藩を離れた者もいると考えられる）。この家臣拡充の状況をみると、4代久恒時代、つまり寛文～元禄中期（1661～1695）頃に大幅に増加したといえる。岡藩の支配機構が整備され支配の基礎ができあがったのが3代久清時代であった（豊田寛三「岡藩、その概史と編成―三宅山御鹿狩の背景」『三宅山御鹿狩絵巻』所収）ことを考えれば、17世紀後半は岡藩にとって家臣団形成の完成時期であり、行政的役職を中心として支配機構を拡大・細分化していった時期といえるであろう。

拡大・細分化していった岡藩における職制・支配機構について、北村清士氏が「嘉永二年」と書き込みをしている「岡藩役名記」（竹田市立歴史資料館所蔵）からみてみよう（第4表）。ここでは、上級家臣と下級家臣の格・職が並べられている。総人数は534人であり、その内の○印がついている377人が主たる格・職といえ、それ以外は付随するものといえる。また、○印がついているものも、支配・行政などに実質的な役割を持つものと家格に応じた単なる待遇だけのものが含まれている。

③ 家臣団と武家屋敷

さて、岡藩において前述のごとく形成された家臣団が、平素生活していた場所は城下町竹田周辺の武家屋敷であった。家臣団に割り当てられた武家屋敷については、天明7年（1787）と寛政7年（1795）の「岡城城下家中図」、文政年間（1818～1829）の「岡藩士屋敷配置図」（すべて竹田市立図書館所蔵）に詳しく見ることができる。ここでは、天明7年（1787）の「岡城城下家中図」により、第3表を参照しながら武家屋敷の状況を概観することにする（第5図）。

岡藩の武家屋敷は、岡城を中心として展開しているといえる。まず、岡城の南側に位置する搦手口を守れる位置に、知行高1,000石を越える老職の下屋敷が配置されている。同じように、大手門から南側に下った位置にも老職の下屋敷が配置されている。老職の中川左近（No.6）は6か所に、中川民部（No.2）は5か所に、中川但馬（No.13）は3か所に、それぞれ下屋敷を所持している。

そして、岡城から下る主要道路に沿って、武家屋敷が配置されている。老職以外の家臣団を（i）200石以上の知行取り、（ii）200石未満の知行取り、（iii）扶持米取り・切米取りに分けて武家屋敷の状況をみると、岡城に近い道路ほど（i）クラスの屋敷が多く配置されている。城下町竹田の南・東方面には、（ii）クラスを中心に配置されている。さらに周辺にいくほど、（iii）クラスの割合が多くなっている。岡城の北東方面にある志賀時代の城下町周辺にも（iii）クラスを中心に配置されている。稲葉川を渡った西岸にも武家屋敷が広がっている。これらは、中川氏が岡に入部した当初から武家屋敷が配置されていたというよりも、新たな家臣の召し抱えや分家の増加などにより、屋敷地を新たに確保しなければならなかったために稲葉川を渡った西岸にも配置したと考えられるであろう。

2. 近世における本調査地域

天明7年（1787）の「岡城城下家中図」において、本調査地域をみると、「上空之進」と「武藤章蔵」の屋敷地があったことになっている。ここでは、上空之進をはじめとする「上家」と武藤章蔵をはじめとする「武藤家」についてみていくことにする。

① 上家

上家の本国は摂津国であり、本家の上家（青木家）は中川清秀の時代に家臣となっている。本調査地域に屋敷を持っていた上家は、青木孫左衛門村義の次男善太夫村昌が、寛文8年（1668）11月に中小姓、51俵4人扶持として召し出されたことに始まる。「諸士系譜新古次第」（中川家所蔵）には、「上奎之進」の項に次のように記されている。

第三代青木孫左衛門次男青木善太夫、隠居知百石を相続して、別て支流となる。

善太夫は、延宝5年（1677）3月に青木孫左衛門の隠居知行を相続することになり、知行100石・馬廻となり、正式に分家となったのである。その後、銀奉行にもなり、知行140石となっている。

善太夫以降の上家について、「岡藩中川家中武鑑 一」（中川家所蔵）に記載されている略系図からみてもとにする。

善太夫村昌 青木孫左衛門村義次男

— 女子 青木孫之進村貞室

— 孫右衛門村章

— 女子 武部安左衛門正倫室

— 岩之進 早世

— 山之助 早世

— 峯右衛門村盈

— 儀右衛門村房 河井圓助一奥養子

— 弥五郎村宣 小羽弥五郎宣未養子

— 伴吾長光 佐藤官右衛門長勝養子

— 女子 吉田六左衛門正富室

— 女子 養子一善室

— 女子

— 庄兵衛一善 堀加次右衛門一英四男

— 左盛 早世

— 弥助 早世

— 女子 薮田番右衛門正直室

— 女子 早世

— 奎之進善風

— 為蔵村邦 上孫左衛門村蔵養子

— 女子 熊田丹下資喜室

— 平馬親光 衣笠隆右衛門親白養子

— 季又 早世

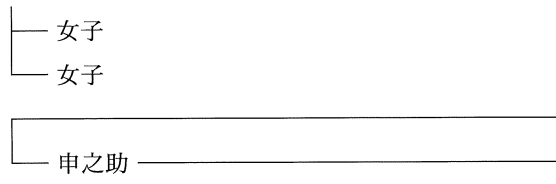
— 伊織村繁

— 女子

— 女子



上奎之進善風
（「三宅山御鹿狩絵巻」より）



（「岡藩中川家中武鑑 一」中川家所蔵）

善太夫の嫡男孫右衛門村章は、組頭・知行200石となっている。また、孫右衛門の姉妹は、青木家・武部家にそれぞれ嫁いでいる。

孫右衛門の跡継ぎには、岩之進・山之助が早世したため、三男の峯右衛門村盈がなっている。そして、峯右衛門は、目付・知行140石となっている。峯右衛門の3人の弟は、河井家・小羽家・佐藤家にそれぞれ養子に出ている。

峯右衛門には娘3人がいた。長女は、吉田家に嫁いでいる。そして、二女と堀加次右衛門一英の四男庄兵衛一善との養子縁組をし、庄兵衛を跡取りとしている。庄兵衛は、近習物頭・知行200石となっている。

庄兵衛には息子6人（内3人は早世）と娘3人（内1人は早世）がいた。跡継ぎは、三男の空之進善風がなっている。天明7年（1787）の「岡城城下家中図」に記載されていた空之進である。空之進は、文化元年（1804）に家督を相続し、大小姓、そして組頭となっている。「岡藩諸士分限帳」（竹田市立歴史資料館所蔵）をみると、知行140石と足高60石、合計200石となっている。また、嘉永2年（1849）と書き込みのある「岡藩役名記」（竹田市立歴史資料館所蔵）には、先手物頭と記載されている。

空之進の弟為蔵村邦は、上家本家の養子となり、もう一人の弟平馬親光は衣笠家の養子となっている。

空之進の跡継ぎは、伊織村繁である。伊織は、「岡藩役名記」では、空之進とは別に小納戸と記されている。また、「岡藩諸士分限帳」においても、空之進とは別給として高身役・八人扶持と記されている。そして安政4年（1857）には、伊織が知行150石となっている（「御家中知行付」竹田市立歴史資料館所蔵）。安政4年までには、伊織が家督相続したということであろう。

伊織の代に明治維新を迎えることになり、跡継ぎは系図によると申之助となるのであろうが、資料的制約により、これ以降の上家については概観することができない。

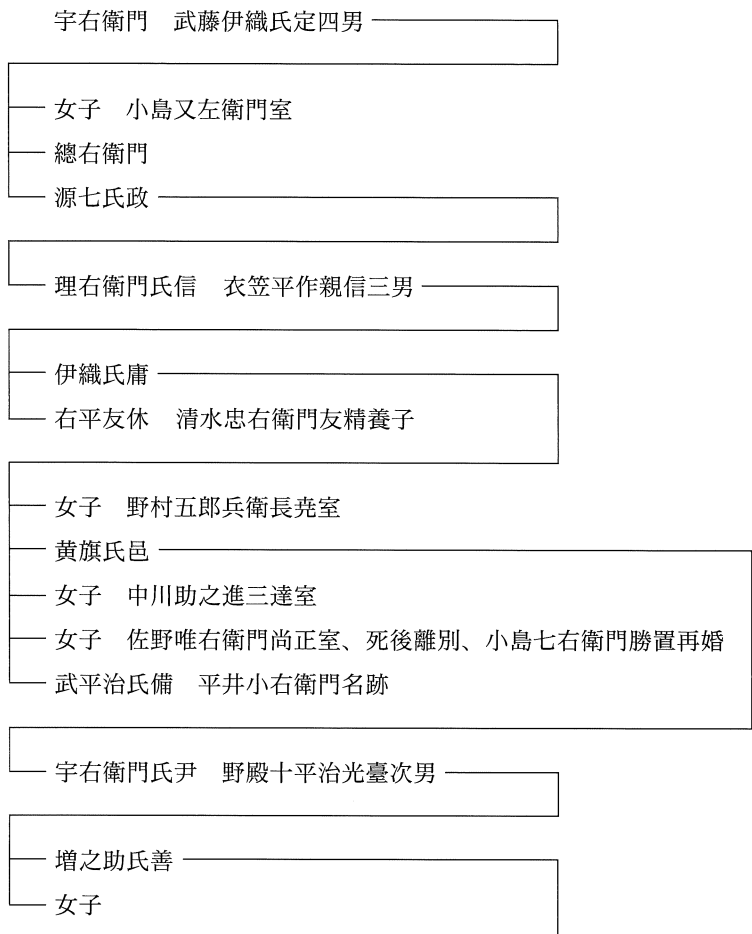
② 武藤家

上家の本国は、摂津国である。本家の武藤家（粟生家）は中川清秀の時代に家臣となっている。本調査地域に屋敷を持っていた武藤家は、武藤伊織氏定の四男宇右衛門が明暦3年（1657）7月に父伊織の再勤の家督を相続したことに始まる。宇右衛門は、知行360石・高身役、後に番手鉄砲頭となっている。宇右衛門が家督相続する前後の事情は、「諸士系譜新古次第 一」（中川家所蔵）に詳しい。「武藤章蔵」の項に次のように記されている。

粟生兵衛尉、後に入道して兵慶と云、其嫡子左藤次、朝鮮にて病死す。兵慶の甥粟生茂太夫左藤次の格・禄を賜。茂太夫、後に粟生平作と改、後又武藤伊織と改。伊織長男武藤總兵衛、病を以退身す。其子平三郎、家督を続。無程平三郎出奔して、知行伊織に戻。伊織老衰して、三男武藤小平次再勤、家督を相続す。其時知行三百六拾石也。小平次、後に宇右衛門と云。宇右衛門死して、家督分知に成る。遺知三百六拾石之内、式百石は嫡子總右衛門に家督被成下、百六拾石は次男源七にて分知被成下。總右衛門は罪科に依て御暇被下、源七の子孫、今の黄旗なり。故に武藤の分家也。今の平作の家も、武藤總兵衛再勤の家督なり。

本調査地域の武藤家は、宇右衛門の次男源七氏政が貞享3年（1686）9月に知行160石を相続したことにより、正式に分家となったのである。

源七以降の武藤家について、「岡藩中川家中武鑑 一」（中川家所蔵）に記載されている略系図からみてみることにする。



武藤黄旗（＝宇右衛門氏尹）
（「三宅山御鹿狩絵巻」より）

（「岡藩中川家中武鑑 一」中川家所蔵）

源七には息子がおらず、衣笠平作親信の三男理右衛門氏信を養子として迎えている。理右衛門は、町奉行・知行150石となっている。

理右衛門には、2人の息子がいた。長男伊織氏庸が家督を相続し、近習物頭・知行230石となっている。弟の右平友休は、清水家に養子に出ている。

伊織には、2人の息子と3人の娘がいた。長男の黄旗氏邑は家督を相続し、先手物頭・知行200石となっている。黄旗は、文化2年（1805）2月に、先手物頭として参勤交代で江戸へ向かう10代藩主久貴を犬飼まで警護している（「金城秘鑑 勇」）。天明7年（1787）の「岡城城下家中図」に記されている章蔵は、この黄旗のことであろう。弟の武平治氏備は、叔父清水右平友休の家に養子に出ていた。しかし、安永4年（1775）6月、養父右平が罪を得たために、武平治も暇を出されていた。その後、天明5年（1785）10月に帰参が許され、平井家の名跡を継げるようになった。黄旗の3人の姉妹は、それぞれ野村家・中川家・佐野家に嫁いでいる。佐野唯右衛門に嫁いだ妹は夫と死別し、その後、小島七右衛門と再婚している。

黄旗は跡継ぎがおらず、野殿十平治光臺の次男宇右衛門氏尹を養子として迎えている。宇右衛門は、家督を文化3年（1806）に相続し、馬廻、高身役・知行150石から、組頭・知行200石となっている。

宇右衛門の跡継ぎは、増之助氏善である。増之助は、「岡藩役名記」において小普請と記されている。また、「岡藩諸士分限帳」では中川平右衛門番として知行150石と記されている。

そして安政4年（1857）には、章蔵が知行150石となっている（「御家中知行付」）。この章蔵が増之助のことなのか、あるいはその跡継ぎなのか、明らかにしえない。いずれにしても、この章蔵の代に明治維新を迎えることになるのであろうが、資料的制約により、これ以降の武藤家については概観することができない。

むすびにかえて

以上、考察を尽くせない点が多いが、本調査地域を中心として、近世における岡藩の家臣団と武家屋敷について検討してきた。しかし結果として、これはあくまでも岡藩の家臣団と武家屋敷を研究していく上での基礎作業的なものでしかなく、関連する様々な問題が山積していることは痛感しているが、今後の課題とせざるをえない。

最後に、本稿をなすにあたって、様々な有益な御助言をいただきました豊田寛三先生、県教委文化課の方々、竹田市教委文化財課の方々に感謝申し上げるとともに、史料閲覧に際して多大な御配慮をいただきました史料所蔵者の皆様にお礼を申し上げたい

第1表 中川家藩主一覧

代	姓 名	受領名	生年月日	没年月日	就任月日	退任月日	戒名	備 考
	(中川清村)	左衛門尉						
	(中川重清)	佐 渡 守						
	中川清秀	瀬兵衛尉	天文11	天正11.4.20			浄光院	大圓院とも称す
	中川秀政	右衛門大夫	永禄11	文禄2.10.24			松徑院	
1	中川秀成	修理大夫	元亀元	慶長17.8.14	天正20.12.6	慶長17.8.14	碧雲寺	
2	中川久盛	内 膳 正	文禄3.7.15	承応2.3.18	慶長17.8	承応2.3.18	法台院	
3	中川久清	山 城 守	慶長20.1.10	天和元.11.10	承応2.5.21	寛文6.4.29	宝蔵院	
4	中川久恒	佐 渡 守	寛永18.7.26	元禄8.6.15	寛文6.4.29	元禄8.6.15	宝浄院	
5	中川久通	因 幡 守	寛文3.5.28	宝永7.2.28	元禄8.8.9	宝永7.2.28	天真院	
6	中川久忠	内 膳 正	元禄11.2.14	寛保2.10.13	宝永7.4.23	寛保2.10.13	通玄院	
7	中川久慶	山 城 守	宝永5.3.8	寛保3.10.31	寛保2.12.19	寛保3.10.31	巍然院	浅野綱長16男
8	中川久貞	修理大夫	享保9.1.19	寛政2.5.20	寛保3.12.21	寛政2.5.20	諦考院	松平信祝2男
9	中川久持	修理大夫	安永5.11.20	寛政10.9.18	寛政2.7.12	寛政10.9.28	巖祇院	中川久徳4男
10	中川久貴	修理大夫	天明7.4.2	文政7.10.20	寛政10.11.29	文化12.9.5	太玄院	松平保光5男
11	中川久教	修理大夫	寛政12.7.1	天保11.9.28	文化12.9.5	天保11.9.28	大鑑院	井伊直中3男
12	中川久昭	修理大夫	文政3.4.4	明治22.9	天保11.12.6	明治2.9.23		藤堂高兌2男
13	中川久成	内 膳 正	嘉永3.8.4	明治30.5.2	明治2.9.23	明治4.7.14		

第2表 岡藩家臣団の知行高等の変遷

(人)

		「金城秘鑑 智」 岡城入部迄 入部以後		「岡藩中川家中武鑑」 (文政7年)	「御家中知行付」 (安政4年)
知 行 取	1,000石～	6	7	6	5
	500石～	17	21	4	3
	200石～	52	61	67	39
	100石～	58	70	120	45
	～100石	8	18	1	1
扶 持 米 取		記 載 な し		25	27
切 米 取		記 載 な し		96	89

第3表 岡藩における家臣団構成

No	「諸士系譜新古次第」				「岡藩中川家中武鑑」			
	諸士No	姓 名	中川家との関係	備 考	姓 名	格・職	知行・禄	
1	1-1	中川午之助	御家門御門葉		中川主馬久質	老職	3000	
2	1-2	中川民部	御家門御門葉		中川民部久友	老職	1700	
3	1-3	茨木応七	御家門御門葉		茂木豹三郎由則	江戸留守居格	300	
4	1-4	中川熊之助	御家門御門葉		中川熊之助重房	近習物頭	200	
5	1-5	高山造酒	御家門御門葉					
6	2-1	中川左近	田近の一族	文政13年養子退職断絶	中川平右衛門長發	老職	4000	
7	2-2	中川玄蕃	田近の一族		中川左京長功	老職	1000	
8	2-3	田近儀左衛門	田近の一族		田近儀左衛門長吉	先手物頭	300	
9	2-4	田近十左衛門	田近の一族		田近弥次右衛門長宗	近習物頭	150	
10	2-5	田近十左衛門	田近の一族	天保3年曾孫出奔	田近左五右衛門忠良	中小性		50④
11	2-6	田近栗太郎	田近の一族		田近左馬之助正誠	近習物頭	300	
12	2-7	田近榮藏	田近の一族		田近邑太義正	吟味役格		55④
13	3-1	中川但見	戸伏の子孫	天保2年倅没断絶 文化4年出奔	中川外江三俊	老職	1200	
14	3-2	戸伏右金吾	戸伏の子孫		戸伏右金吾宗重	中小性		50④
15	3-3	佐野清左衛門	戸伏の子孫		戸伏九兵衛正武	近習物頭	220	
16	3-4	佐野 渡	戸伏の子孫					
17	3-5	戸伏英次郎	戸伏の子孫		戸伏楯藏宗美	馬廻	100	
18	4-1	古田右馬丞	古田の一族		古田内記重功	江戸留守居格	400	
19	4-2	中川藤四郎	古田の一族		中川頼母廣長	老職	1050	
20	4-3	古田四郎五郎	古田の一族		古田四郎五郎重言	銀奉行	120	
21	5-1	熊田藤助	熊田の一族		熊田摠之助資俊	高身役	200	
22	5-2	熊田小市郎	熊田の一族		熊田勇資愛	馬廻	250	
23	5-3	熊田吉藏	熊田の一族		熊田吉藏清直	普請目付・墨奉行		56④
24	5-4	熊田万八	熊田の一族		熊田孫四郎資義	吟味役格		⑮
25	5-5	熊田織右衛門	熊田の一族		熊田織右衛門資恕	近習物頭	220	
26	6-1	井上与五郎	井上の一族		井上主水左衛門並増	年寄・奉行	750	
27	6-2	井上快助	井上の一族		井上快助三友	組頭格	150	
28	6-3	井上左織	井上の一族		井上左織三俊	小性	120	
29	6-4	井上熊之助	井上の一族		井上鉄五郎師正	大小性	100	⑮
30	7-1	大岩吉右衛門	清村以前より幕下		大岩猿五郎義門	馬廻	190	
31	7-2	大岩応助	清村以前より幕下		大岩応助正寛	馬廻	100	
32	7-3	大岩守衛	清村以前より幕下		大岩傳兵衛昌邦	長柄奉行	200	
33	7-4	大岩小五郎	清村以前より幕下		大岩五兵衛重賢	江戸留守居格	200	
34	8-1	森田弥平次	清村時代に勤仕		森田摠左衛門守篤	先手物頭	200	
35	8-2	森田多仲	清村時代に勤仕		森田半右衛門吉信	江戸留守居格	230	
36	8-3	森田吉太郎	清村時代に勤仕		森田梶之助忠信	大小性		60④
37	9-1	永田類右衛門	重清時代に勤仕		永田類右衛門寄武	中小性		50④
38	9-2	丸山金弥	重清時代に勤仕		丸山市郎右衛門保昭	高身役	150	

39	10-1	秋岡甚兵衛	清秀時代に勤仕	秋岡甚兵衛正明	中小性	50④
40	10-2	飯田定之助	清秀時代に勤仕			
41	10-3	田島雲平	清秀時代に勤仕			
42	10-4	田嶋藻兵衛	清秀時代に勤仕			
43	10-5	田島令吉	清秀時代に勤仕	田島宗賢正匡	手医師並	⑩
44	10-6	野口悦蔵	清秀時代に勤仕	野口悦蔵重賢	地方吟味役	70④
45	10-7	田中又兵衛	清秀時代に勤仕			
46	11-1	菅 伊織	清秀時代に勤仕	菅彦次郎相与	近習物頭	200
47	11-2	菅 六郎	清秀時代に勤仕	菅六郎相利	蔵奉行	180
48	11-3	三宅弾助	清秀時代に勤仕	三宅弾助吉亨	高身役	170
49	12-1	池田嘉吉	清秀時代に勤仕	池田兼次郎則雅	小普請	150
50	12-2	鳥養総左衛門	清秀時代に勤仕	鳥養惣左衛門正安	大小性	50④
51	12-3	下村牧太郎	清秀時代に勤仕	下村丹治政武	小性・納戸役	140
52	13-1	長尾助五郎	清秀時代に勤仕	長尾助五郎為政	近習物頭	240
53	13-2	上嶋織登	清秀時代に勤仕	上島八郎右衛門正師	高身役	120
54	13-3	森村甚五郎	清秀時代に勤仕	森村甚五郎正亮	馬廻	150
55	14-1	上 龍之助	清秀時代に勤仕	上為蔵村邦	大小性	160
56	14-2	上 奎之進	清秀時代に勤仕	上奎之進善風	組頭	200
57	14-3	上 弥次郎	清秀時代に勤仕	上弥原治村幸	馬廻	140
58	15-1	三宅伴十郎	清秀時代に勤仕	三宅小右衛門村真	大小性	120
59	15-2	三宅土平	清秀時代に勤仕	三宅弥吉村義	馬廻	150
60	15-3	三宅喜十郎	清秀時代に勤仕	三宅惣兵衛良顕	江戸留守居格	220
61	16-1	安西吉三郎	清秀時代に勤仕	安西八郎左衛門宗城	組頭格	150
62	16-2	安西勝馬	清秀時代に勤仕	安西八百太郎宗教	馬廻	150
63	16-3	安西八兵衛	清秀時代に勤仕	安西八兵衛宗興	中小性	50④
64	16-4	安西鞭蔵	清秀時代に勤仕	安西鞭蔵宗喜	馬廻	140
65	17-1	下村市之丞	清秀時代に勤仕	下村市之丞良能	銀奉行	270
66	17-2	栗生村三郎	清秀時代に勤仕	栗生惣兵衛氏展	大小性	55④
67	17-3	武藤章蔵	清秀時代に勤仕	武藤宇右衛門氏尹	高身役	150
68	17-4	安威左門	清秀時代に勤仕	安威右近右衛門宗親	中小性番頭	320
69	17-5	安威十兵衛	清秀時代に勤仕	安威築之助勝栄	中小性	51④
70	17-6	萱野七郎左衛門	清秀時代に勤仕	萱野次郎兵衛正光	大小性	200
71	18-1	杉村義一	清秀時代に勤仕	杉村宗朔獻吉	匕医師	⑮
72	18-2	杉村新之助	清秀時代に勤仕	杉村淳白包文	手医師並	⑭
73	18-3	太田畔次	清秀時代に勤仕	太田平七元紀	先手物頭	200
74	19-1	太田多十郎	清秀時代に勤仕	太田延八雅言	大小性	110
75	19-2	平尾又之進	清秀時代に勤仕	平尾又之進	中小性	51④
76	19-3	平尾新三郎	清秀時代に勤仕	平尾兵馬宗則	中小性	50④
77	20-1	阿坂奎兵衛	清秀時代に勤仕	阿坂猪吉郎成中	馬廻	150
78	20-2	阿坂右仲	清秀時代に勤仕	阿坂右仲成教	使番格	140
79	20-3	下村司馬次郎	清秀時代に勤仕	下村熊次郎忠恕	馬廻	250

80	20- 4	粟生平司	清秀時代に勤仕		粟生弥助重喜	大小性	80④
81	21- 1	横田桝蔵	清秀時代に勤仕		横田舎光賢	馬廻	180
82	21- 2	横田藤右衛門	清秀時代に勤仕		横田藤右衛門光真	大小性番頭・用人	310
83	21- 3	田能村平八郎	清秀時代に勤仕		田能村平八郎秀芳	小性	120
84	21- 4	田能村平兵衛	清秀時代に勤仕				
85	21- 5	下石勝太郎	清秀時代に勤仕		下村勘右衛門頼功	高身役	100
86	21- 6	山路浅之丞	清秀時代に勤仕		山路覚蔵頼金	組頭格	150
87	22- 1	柘植新右衛門	清秀時代に勤仕	文政3年孫出奔	柘植与五郎吉祐	大小性	210
88	22- 2	柘植総輔	清秀時代に勤仕				
89	22- 3	赤座令蔵	清秀時代に勤仕		赤坐次郎右衛門正臣	目付格	100
90	22- 4	赤坐三右衛門	清秀時代に勤仕		赤坐弥六郎頼章	中小性番頭・奉行	300
91	23- 1	塩山一学	清秀時代に勤仕		塩山作右衛門正経	用人格	290
92	23- 2	塩山忠助	清秀時代に勤仕	寛政5年土官召放永牢			
93	23- 3	佐曾利弥市郎	清秀時代に勤仕		佐曾利弥市郎重英	大小性	150
94	23- 4	幡本登三郎	清秀時代に勤仕		幡本笹右衛門廣行	大小性	150
95	24- 1	大河原 亘	清秀時代に勤仕		大河原廣右衛門友雄	大小性番頭・用人	300
96	24- 2	大河原万吉	清秀時代に勤仕		大河原九郎左衛門晴輔	馬廻	150
97	24- 3	柏原平助	清秀時代に勤仕		柏原平助友躬	吟味役格	65④
98	25- 1	吉田八郎兵衛	清秀時代に勤仕		吉田八郎兵衛尚運	使番	200
99	25- 2	吉田清之丞	清秀時代に勤仕		吉田清之丞正備	大小性	120
100	25- 3	吉田弓蔵	清秀時代に勤仕		吉田新右衛門正秘	大小性	⑮
101	25- 4	福田 登	清秀時代に勤仕				
102	26- 1	津山勘右衛門	清秀時代に勤仕		山勘右衛門祐行	目付	100
103	26- 2	家原玉之助	清秀時代に勤仕		家原玉之助光武	中小性	50④
104	26- 3	家原琢右衛門	清秀時代に勤仕		家原半兵衛重員	吟味役格	55④
105	26- 4	家原八郎右衛門	清秀時代に勤仕		家原軍太世則	大小性	140
106	27- 1	野尻傳兵衛	清秀時代に勤仕		野尻倉五郎邦行	高身役	200
107	27- 2	野尻藤次郎	清秀時代に勤仕		野尻藤次郎正平	中小性	50④
108	27- 3	野尻祥蔵	清秀時代に勤仕		野尻市右衛門直喜	大小性	50④
109	27- 4	村上五郎右衛門	清秀時代に勤仕		村上寛次郎邦達	馬廻	180
110	28- 1	原田又左衛門	清秀時代に勤仕		原田嘉苗直英	小性	130
111	28- 2	渡邊忠治	清秀時代に勤仕	天保9年倅土官召放坊主	渡邊彦兵衛長宴	中小性	50④
112	28- 3	渡邊軍治	清秀時代に勤仕		渡邊叔登長方	馬廻	100
113	29- 1	樋口喜平次	清秀時代に勤仕		樋口喜平治勝明	馬廻	150
114	29- 2	樋口謙平	清秀時代に勤仕		樋口勝助勝文	馬廻	150
115	29- 3	村治竹之丞	清秀時代に勤仕		村治長右衛門惟正	吟味役格	50④
116	29- 4	辻 平馬	清秀時代に勤仕		辻平馬昭宣	近習物頭	300
117	30- 1	森本弥次兵衛	清秀時代に勤仕		森本五郎三郎宗保	近習物頭	330
118	30- 2	瓦林恭次郎	清秀時代に勤仕		瓦林半右衛門義利	高身役	180
119	30- 3	山岸平六	清秀時代に勤仕		山岸坂右衛門重異	用人格	120
120	30- 4	山岸権五郎	清秀時代に勤仕		山岸権五郎尚古	先手物頭	170

121	31-1	外川権次郎	清秀時代に勤仕		外川淵蔵重基	中小性	50④
122	31-2	外川晋輔	清秀時代に勤仕		外川晋輔重信	中小性	61④
123	31-3	櫻井熊蔵	清秀時代に勤仕		櫻井熊蔵次新	馬廻	100
124	32-1	進藤良蔵	清秀時代に勤仕		進藤宗左衛門猛英	長柄奉行	200
125	32-2	進藤衛七	清秀時代に勤仕		進藤衛七苗曹	馬廻	100
126	32-3	古澤右内	清秀時代に勤仕		古澤九郎右衛門直廉	大小性番頭・仮城代	330
127	32-4	古澤露之助	清秀時代に勤仕				
128	33-1	野溝虎彦	清秀時代に勤仕		野溝助兵衛清格	馬廻	170
129	33-2	野溝与兵衛	清秀時代に勤仕		野溝八百吉是光	馬廻	100
130	33-3	小嶋彦左衛門	清秀時代に勤仕		小嶋藤八勝易	吟味役格	⑮
131	33-4	小嶋玉記	清秀時代に勤仕		小嶋兵左衛門正乙	近習物頭・元占役	240
132	34-1	福田壽平	清秀時代に勤仕	寛政元年出奔			
133	34-2	澤 小源次	清秀時代に勤仕		澤恵左衛門友光	先手物頭	200
134	34-3	泥藤新次郎	清秀時代に勤仕		泥藤是蔵安成	馬廻	100
135	34-4	小原隼太	清秀時代に勤仕		小原九兵衛正修	先手物頭	200
136	35-1	伊藤九兵衛	秀政時代に勤仕	寛政12年士官召放揚屋入			
137	35-2	福永新左衛門	秀政時代に勤仕		福永傳兵衛光明	先手物頭	200
138	35-3	井上宗三郎	秀政時代に勤仕		井上玉五郎重遠	馬廻	100
139	36-1	野溝玄碩	秀政時代に勤仕		野溝周庵景寧	手医師	100
140	36-2	柳原太郎兵衛	秀政時代に勤仕		柳原俊輔光輝	中小性	50④
141	36-3	三宅九市兵衛	秀政時代に勤仕		三宅健五郎正得	馬廻	240
142	37-1	草刈喜七郎	秀政時代に勤仕		草刈喜七郎辰尹	高身役・町奉行	160
143	37-2	草刈真吉	秀政時代に勤仕	文化11年倅出奔断絶			
144	38-1	八木虎三郎	秀政時代に勤仕		八木虎三郎邦光	馬廻	140
145	38-2	本郷虎太郎	秀政時代に勤仕		本郷牧右衛門義真	先手物頭	200
146	38-3	吉岡恭十郎	秀政時代に勤仕		吉岡刑部左衛門直養	組頭	200
147	39-1	田伏英次郎	秀政時代に勤仕		田伏半六武美	高身役	140
148	39-2	田伏市郎左衛門	秀政時代に勤仕		田伏哲太郎光賢	小性	130
149	39-3	田伏又平	秀政時代に勤仕	文化7年養子出奔			
150	39-4	御牧孫兵衛	秀政時代に勤仕		御牧孫兵衛正元	大小性	100
151	40-1	伊東良貞	秀政時代に勤仕		伊東良廸祐吉	手医師	⑮
152	40-2	伊東意伯	秀政時代に勤仕		伊東玄育祐俊	匕医師	120
153	40-3	藪田友輔	秀政時代に勤仕		藪田番右衛門正直	高身役	140
154	40-4	藪田段之進	秀政時代に勤仕		藪田段之進重博	使番	150
155	40-5	角田才次郎	秀政時代に勤仕		角田才次郎利簡	組頭格	100
156	41-1	右田甚右衛門	初代秀成時代に勤仕		右田甚右衛門正附	近習物頭	200
157	41-2	右田貞吉	初代秀成時代に勤仕				
158	41-3	深田治部	初代秀成時代に勤仕		深田治部忠重	馬廻	120
159	41-4	拝郷五助	初代秀成時代に勤仕				
160	41-5	平井亀太郎	初代秀成時代に勤仕		平井亀太郎氏義	馬廻	100
161	41-6	平井 進	初代秀成時代に勤仕		平井進統延	中小性	50④

162	42-1	柳井藻次郎	初代秀成時代に勤仕		柳井藻次郎重固	郡奉行		⑳
163	42-2	大内権左衛門	初代秀成時代に勤仕	文化7年倅士官召放徒士				
164	42-3	菅谷駒蔵	初代秀成時代に勤仕		菅谷猛助次強	高身役	150	
165	43-1	衣笠平馬	初代秀成時代に勤仕		衣笠平馬親光	高身役	170	
166	43-2	鵜飼平太	初代秀成時代に勤仕		鵜飼福三郎枝美	用人	240	
167	43-3	武部藤治	初代秀成時代に勤仕		武部藤治成治	馬廻	150	
168	43-4	兼松恒左衛門	初代秀成時代に勤仕		兼松力武敏	吟味役	100	
169	44-1	菅 玄澤	初代秀成時代に勤仕		菅玄澤相光	小普請		㉑
170	44-2	井上三郎左衛門	初代秀成時代に勤仕		井上大作忠世	目付		50④
171	44-3	曾我高麗太郎	初代秀成時代に勤仕		曾我平馬正明	目付	130	
172	44-4	池田長左衛門	初代秀成時代に勤仕		池田長左衛門正権	大小性	140	
173	45-1	平手熊五郎	2代久盛時代に勤仕		平手清兵衛孝秀	中小性		50④
174	45-2	田能村太一	2代久盛時代に勤仕		田能村太一思通	小普請		㉒
175	45-3	田能村周助	2代久盛時代に勤仕	寛政6年病死断絶				
176	45-4	粟生九郎兵衛	2代久盛時代に勤仕		粟生九郎兵衛正武	銀奉行	140	
177	46-1	三澤喜三郎	2代久盛時代に勤仕		三澤喜三郎直常	馬廻	150	
178	46-2	高畑源次郎	2代久盛時代に勤仕		高嶋弥次兵衛正俊	吟味役格	100	
179	46-3	小羽馬兵衛	2代久盛時代に勤仕					
180	46-4	小羽源之丞	2代久盛時代に勤仕		小羽源之丞義廉	中小性		45④
181	46-5	平原仙右衛門	2代久盛時代に勤仕	文化9年士官召放				
182	46-6	中村泰治	2代久盛時代に勤仕					
183	47-1	喜多村芝登	2代久盛時代に勤仕		喜多村芝登景敏	中小性		65④
184	47-2	仲山仁兵衛	2代久盛時代に勤仕		仲山恵助包昭	中小性		40④
185	47-3	仲山元順	2代久盛時代に勤仕		仲山三省包信	手医師並		③
186	47-4	峯田左忠太	2代久盛時代に勤仕		峯田左忠太是慶	中小性		50④
187	48-1	志水雲治	2代久盛時代に勤仕		志水雲四郎元古	用人格	220	
188	48-2	寺村常右衛門	2代久盛時代に勤仕		寺村瀧之進伯治	大小性	120	
189	48-3	河井喜三郎	2代久盛時代に勤仕		河井儀右衛門友周	大小性	150	
190	49-1	宗 長兵衛	2代久盛時代に勤仕		宗長兵衛鎮智	代官役・山林奉行		60④
191	49-2	朽木又三郎	2代久盛時代に勤仕		朽木儀之助重協	馬廻	140	
192	49-3	原野清助	2代久盛時代に勤仕		原野萩助義守	中小性		60④
193	50-1	高井太仲	2代久盛時代に勤仕		高井玄亭政達	手医師並		50④
194	50-2	井上熊太郎	2代久盛時代に勤仕		井上熊太郎正得	中小性		50④
195	50-3	黒川三益	2代久盛時代に勤仕		黒川周益正親	手医師		50④
196	51-1	河野勘九郎	2代久盛時代に勤仕		河野右傳通長	大小性		60④
197	51-2	杉谷七右衛門	2代久盛時代に勤仕		杉谷熊次郎宗胤	中小性		50④
198	51-3	水嶋幾馬	2代久盛時代に勤仕		水嶋幾馬安宅	小性		55④
199	52-1	野殿宗右衛門	2代久盛時代に勤仕		野殿宗右衛門光格	近習物頭・元占役	230	
200	52-2	大竹正二郎	2代久盛時代に勤仕		大竹傳右衛門正敬	用人格・江戸留守居	130	
201	52-3	富賀菅太郎	2代久盛時代に勤仕		富賀左平治正國	中小性		50④
202	53-1	佐藤七兵衛	2代久盛時代に勤仕		佐藤次郎八正伴	馬廻	100	

203	53- 2	早嶋逸平	2代久盛時代に勤仕		早島半左衛門忠良	中小性		50④
204	53- 3	堀田作左衛門	2代久盛時代に勤仕		堀田作左衛門義通	大小性	140	
205	53- 4	堀田又十郎	2代久盛時代に勤仕		堀田悦之助正則	馬廻	100	
206	53- 5	雑賀長太郎	2代久盛時代に勤仕		雑賀逸八正治	中小性・裁許所留役		50④
207	54- 1	桂 舍人	2代久盛時代に勤仕		桂多内一中	組頭格	400	
208	54- 2	青木八郎右衛門	2代久盛時代に勤仕		青木八郎右衛門一逸	先手物頭	200	
209	55- 1	吉田熊太郎	3代久清時代に勤仕		吉田熊太郎尚徳	馬廻	100	
210	55- 2	安井織之助	3代久清時代に勤仕		安井吉次郎正典	組頭格	150	
211	55- 3	廣澤次郎左衛門	3代久清時代に勤仕	文化4年倅御暇				
212	56- 1	鴨宮右左衛門	3代久清時代に勤仕		鴨宮右左衛門義賢	目付格	150	
213	56- 2	清澄秀四郎	3代久清時代に勤仕		清澄孫三郎景有	馬廻	100	
214	56- 3	成瀬忠吾	3代久清時代に勤仕		成瀬忠吾師政	吟味役格・代官役		61④
215	57- 1	石本太郎右衛門	3代久清時代に勤仕		石本卯又政信	中小性		60④
216	57- 2	浦部右蔵	3代久清時代に勤仕		浦部五郎兵衛正形	江戸留守居格・旗奉行	200	
217	57- 3	嶋田嘉縫	3代久清時代に勤仕		嶋田多次郎英邦	中小性		50④
218	58- 1	小河弥右衛門	3代久清時代に勤仕		小河鶴太郎一崇	時主間末席無格	500	
219	58- 2	葛巻直衛	3代久清時代に勤仕		葛巻藻蔵重明	中小性		50④
220	59- 1	野尻宇賀治	3代久清時代に勤仕		野尻宇賀治一心	吟味役		50④
221	59- 2	安野力之助	3代久清時代に勤仕		安野力之助政邦	高身役	200	
222	59- 3	宇佐美衛守	3代久清時代に勤仕		宇佐美藤馬重固	馬廻	130	
223	59- 4	二宮玄斎	3代久清時代に勤仕		二宮玄晏安信	匙医師	120	
224	60- 1	飯尾嘉次郎	3代久清時代に勤仕		飯尾介左衛門雅儔	大小性	130	
225	60- 2	飯尾彦太郎	3代久清時代に勤仕		飯尾右源光基	使番格	100	
226	60- 3	和田市郎助	3代久清時代に勤仕		和田市郎助義周	馬廻	100	
227	61- 1	稻生勇五郎	3代久清時代に勤仕	寛政元年断絶				
228	61- 2	市浦梯助	3代久清時代に勤仕		市浦柔助好發	近習物頭	380	
229	61- 3	廣瀬彦九郎	3代久清時代に勤仕	天保3年孫出奔	廣瀬彦八郎政道	中小性		55④
230	61- 4	松原庫太	3代久清時代に勤仕		松原弥吉郎正方	中小性		50④
231	61- 5	姥柳郁助	3代久清時代に勤仕		姥柳淳平公明	中小性		53④
232	62- 1	蘆澤周平	3代久清時代に勤仕	享和2年御暇	芦澤二右衛門元猛	高身役		65④
233	62- 2	馬淵城右衛門	3代久清時代に勤仕		馬淵周兵衛正身	目付格・銀奉行	170	
234	62- 3	香川幸平	3代久清時代に勤仕		香川大輔勝昌	吟味役格・蔵奉行	100	
235	63- 1	谷 玼平	3代久清時代に勤仕		谷水右衛門正重	中小性		55④
236	63- 2	後藤伸平	3代久清時代に勤仕		後藤伸平宗春	小性		55④
237	63- 3	岡部石五郎	3代久清時代に勤仕		岡部石五郎正武	馬廻		⑮
238	64- 1	法崎総平	4代久恒時代に勤仕		法崎六郎安利	中小性		50④
239	64- 2	神戸帰都蔵	4代久恒時代に勤仕					
240	64- 3	河野弥三右衛門	4代久恒時代に勤仕	文化14年孫士官召放				
241	65- 1	志水源之助	4代久恒時代に勤仕		志水源之助則興	小普請		50④
242	65- 2	佐藤叟之進	4代久恒時代に勤仕		佐藤叟之進信明	中小性		50④
243	65- 3	佐野斧右衛門	4代久恒時代に勤仕	文化15年倅士官召放				

244	66- 1	佐藤貞次郎	4代久恒時代に勤仕		佐藤官右衛門長可	中小性		50④
245	66- 2	足立愛吉	4代久恒時代に勤仕		足立儀左衛門盛邑	大小性		50④
246	66- 3	足立鈴之助	4代久恒時代に勤仕		足立紋平盛興	中小性		55④
247	66- 4	田仲善次郎	4代久恒時代に勤仕		田仲織衛良寛	近習物頭・銀札頭取	230	
248	66- 5	門石孫右衛門	4代久恒時代に勤仕		門石孫右衛門姿季	中小性		45④
249	67- 1	安達秀八郎	4代久恒時代に勤仕		安達左金吾恵國	高身役	120	
250	67- 2	飯野熊三郎	4代久恒時代に勤仕		飯野作太郎宗房	小性		58④
251	68- 1	千田鵬次郎	4代久恒時代に勤仕		千田市郎正勝	中小性		50④
252	68- 2	松本平學	4代久恒時代に勤仕		松本庄左衛門正善	大小性	120	
253	68- 3	柘植与一右衛門	4代久恒時代に勤仕		柘植兵五郎行堅	目付	120	
254	68- 4	高山福之助	4代久恒時代に勤仕		高山太左衛門蕃教	高身役		70④
255	68- 5	鷹巢八重八	4代久恒時代に勤仕					
256	69- 1	丹羽恭助	4代久恒時代に勤仕		丹羽仁兵衛武昌	高身役		②①
257	69- 2	伊藤罷一郎	4代久恒時代に勤仕		伊藤作右衛門幸猛	近習物頭	220	
258	69- 3	岩瀬小平治	4代久恒時代に勤仕		岩瀬小平治直行	吟味役	180	
259	69- 4	飯田玄	4代久恒時代に勤仕		飯田玄碩	手医師並	100	
260	69- 5	加藤静馬	4代久恒時代に勤仕		加藤太郎助吉猷	先手物頭	200	
261	70- 1	山岡小忠治	4代久恒時代に勤仕	文化6年倅御暇在宅				
262	70- 2	木村城之助	4代久恒時代に勤仕		木村小兵太信直	馬廻	100	
263	71- 1	熊野伴助	4代久恒時代に勤仕	文化11年曾孫出奔				
264	71- 2	山住	4代久恒時代に勤仕		山住甚兵衛義制	中小性		45④
265	71- 3	高久作五郎	4代久恒時代に勤仕		高久勘之助正直	中小性		40④
266	72- 1	堀熊太郎	4代久恒時代に勤仕		堀十學一良	馬廻	200	
267	72- 2	堀 圓藏	4代久恒時代に勤仕		堀宅十郎一卿	高身役	90	
268	72- 3	伊藤嘉右衛門	4代久恒時代に勤仕		伊藤善兵衛義明	馬廻	100	
269	72- 4	服部才八	4代久恒時代に勤仕	寛政元年出奔				
270	73- 1	大津留臺之助	4代久恒時代に勤仕		大津留角左衛門惟精	町奉行	120	
271	73- 2	吉田粟司	4代久恒時代に勤仕		吉田粟司永勝	大小性		50④
272	73- 3	石井忠右衛門	4代久恒時代に勤仕		石井平次右衛門正登	吟味役格		51④
273	73- 4	伊藤貞右衛門	4代久恒時代に勤仕		伊藤貞右衛門宗意	江戸留守居格・大目付	200	
274	73- 5	松田善之丞	4代久恒時代に勤仕		松田左市郎義制	馬廻	100	
275	74- 1	磯野辰之助	4代久恒時代に勤仕		磯野喜右衛門長為	高身役	100	
276	74- 2	夏目佑三郎	4代久恒時代に勤仕		夏目大藏顕行	小普請	100	
277	74- 3	岡安彦五郎	4代久恒時代に勤仕	寛政12年養子出奔				
278	74- 4	長谷川左仲	4代久恒時代に勤仕		長谷川武右衛門祐或	中小性番頭	400	
279	75- 1	久保林三郎	4代久恒時代に勤仕					
280	75- 2	中島熊五郎	4代久恒時代に勤仕		仲島瀧右衛門善照	組頭	200	
281	75- 3	吉田島之丞	4代久恒時代に勤仕		吉田兵右衛門重登	目付		60④
282	75- 4	河合洲左衛門	4代久恒時代に勤仕		河合洲左衛門和肅	組頭	200	
283	75- 5	鈴木雄左衛門	4代久恒時代に勤仕	文政元年倅出奔				
284	76- 1	田仲 左	4代久恒時代に勤仕	寛政10年出奔				

285	76-2	上田善八	4代久恒時代に勤仕		上田此面親微	馬廻	140	
286	76-3	齊田 典	4代久恒時代に勤仕		齊田幾右衛門善行	先手物頭	190	
287	77-1	小泉富蔵	4代久恒時代に勤仕		小泉勝司勝重	近習物頭	500	
288	77-2	小泉仙蔵	4代久恒時代に勤仕		小泉長次郎	馬廻	100	⑩
289	77-3	小泉権兵衛	4代久恒時代に勤仕	文政13年倅格禄召放徒士	小泉傳七郎勝善	組頭	200	
290	77-4	大町弥市郎	4代久恒時代に勤仕	享和2年御暇				
291	77-5	大町弥吉	4代久恒時代に勤仕	文政8年永久御暇	大町弥吉親民	中小性		50④
292	78-1	大津順次	4代久恒時代に勤仕	寛政3年出奔				
293	78-2	原田善左衛門	4代久恒時代に勤仕	天保10年倅病死断絶	原田平十郎善範	高身役		65④
294	78-3	酒井新兵衛	4代久恒時代に勤仕		酒井郷左衛門行敬	先手物頭	160	
295	79-1	武衛源八	4代久恒時代に勤仕		武衛源八義包	馬廻	150	
296	79-2	青山市之丞	4代久恒時代に勤仕					
297	79-3	大庭臺八郎	4代久恒時代に勤仕		大庭平八郎景治	中小性		51④
298	79-4	進 晋之進	4代久恒時代に勤仕		進八郎麗明	先手物頭		⑳
299	80-1	室 蘭吉	4代久恒時代に勤仕		室十之助重義	高身役	230	
300	80-2	南方丹治	4代久恒時代に勤仕		南方九左衛門元軌	馬廻	150	
301	80-3	伊木勘吉	4代久恒時代に勤仕	文政6年倅士官召放徒士				
302	80-4	高田半蔵	4代久恒時代に勤仕		高田半蔵政篤	大小性		⑮
303	81-1	野村八右衛門	4代久恒時代に勤仕		野村八右衛門長當	高身役	150	
304	81-2	古田佐右衛門	4代久恒時代に勤仕		古田佐右衛門万卿	組頭	200	
305	81-3	梶原逸馬	4代久恒時代に勤仕		梶原逸馬景元	中小性		55④
306	81-4	牧原傳蔵	4代久恒時代に勤仕					
307	82-1	蘆澤市之進	5代久通時代に勤仕					
308	82-2	村上八左衛門	5代久通時代に勤仕	文化11年曾孫逐電				
309	82-3	河津傳蔵	5代久通時代に勤仕					
310	83-1	鈴木 唱	5代久通時代に勤仕	寛政6年士官召放徒士				
311	83-2	井上源泰	5代久通時代に勤仕		井上尚伴昌言	匕医師	100	
312	83-3	井上幸啓	5代久通時代に勤仕		井上玄水昌光	手医師並		⑤
313	84-1	宇野臺吉	5代久通時代に勤仕		宇野臺吉長胤	大小性		50④
314	84-2	加藤次郎太	5代久通時代に勤仕		加藤弥三郎義敷	馬廻	100	
315	84-3	小松澤右衛門	5代久通時代に勤仕	文政4年倅士官召放徒士				
316	84-4	小松謙吉	5代久通時代に勤仕					
317	85-1	村上九郎	6代久忠時代に勤仕		村上卯吉通房	大小性		50④
318	85-2	赤松琢次郎	6代久忠時代に勤仕		赤松榮左衛門則嘉	大小性	100	
319	85-3	土居廣次	6代久忠時代に勤仕		土居万兵衛重固	目付格		65④
320	85-4	飯田?三郎	6代久忠時代に勤仕		飯田彦左衛門一清	吟味役		55④
321	85-5	長村十郎右衛門	6代久忠時代に勤仕		長村十郎右衛門吉雄	高身役・吟味役	120	
322	86-1	小池甚右衛門	6代久忠時代に勤仕	天保10年孫御暇	小池清兵衛重富	先手物頭・大目付介	180	
323	86-2	佐藤新三郎	6代久忠時代に勤仕		佐藤新三郎尚方	小性		50④
324	86-3	久保良八	6代久忠時代に勤仕	天保4年倅士官召放徒士	久保良次郎為任	目付		55④
325	86-4	中村幾次郎	6代久忠時代に勤仕		仲村幾次郎	中小性		50④

326	86- 5	森 辰次	6代久忠時代に勤仕	天保4年孫出奔	森重太郎典靖	中小性		50④
327	86- 6	内藤善八	6代久忠時代に勤仕					
328	86- 7	牧 彦一郎	6代久忠時代に勤仕		牧驒藏明輔	目付格		55④
329	87- 1	横山弾七	6代久忠時代に勤仕	文政3年孫士官召放徒士				
330	87- 2	横山政次郎	6代久忠時代に勤仕	文化9年士官召放永牢				
331	87- 3	片岡権蔵	6代久忠時代に勤仕					
332	88- 1	石川良達	6代久忠時代に勤仕		石川良碩政直	ヒ医師		
333	88- 2	佐藤大輔	6代久忠時代に勤仕		佐藤勘兵衛正利	先手物頭	200	
334	89- 1	浅野勝左衛門	6代久忠時代に勤仕		浅野清記秀貫	目付格	180	
335	89- 2	浅野庄兵衛	6代久忠時代に勤仕		浅野庄兵衛秀賢	吟味役		55④
336	89- 3	武衛友次郎	6代久忠時代に勤仕		武衛兼右衛門義敬	組頭	200	
337	89- 4	杉原順助	6代久忠時代に勤仕		杉原順助景捷	馬廻	150	
338	90- 1	増原牧太	7代久慶の御供		増原良輔昌邦	中小性		51④
339	90- 2	松本保左衛門	7代久慶の御供	文政12年倅士官召放先徒士	松本九左衛門昭武	先手物頭	200	
340	90- 3	池田 舎	7代久慶の御供		池田舎教達	江戸留守居格	200	
341	91- 1	正田喜内	6代久忠時代に勤仕		正田弥兵衛義制	大小性・倉目付		66④
342	91- 2	江見平蔵	6代久忠時代に勤仕		江見市三郎則武	大小性	150	
343	91- 3	佐藤光次郎	7代久慶時代に勤仕		佐藤九左衛門政信	高身役		100
344	92- 1	福富段兵衛	8代久貞の御供	文化元年養子出奔				
345	92- 2	長塩庸平	8代久貞の御供		長塩又左衛門親宗	年寄	650	
346	92- 3	長塩堅蔵	8代久貞の御供					
347	92- 4	白井井司	8代久貞の御供	寛政2年格禄召上蟄居				
348	92- 5	北尾伴次郎	8代久貞の御供		北尾伴次郎武芳	中小性		50④
349	93- 1	里見啓之助	8代久貞時代に勤仕		里見三郎左衛門義周	大小性番頭	350	
350	93- 2	中澤平輔	8代久貞時代に勤仕	文政12年孫出奔	中澤岩之助信民	小性	100	
351	93- 3	里見織之丞	8代久貞時代に勤仕		里見織之丞義典	大小性	100	
352	93- 4	河野玄知	8代久貞時代に勤仕	天保5年養子格禄召放	河野玄丹有常	手医師並		⑮
353	93- 5	井上玄丹	8代久貞時代に勤仕	文政7年本家養子				
354	93- 6	辻野藤蔵	8代久貞時代に勤仕					
355	94- 1	北條栄之助	8代久貞時代に勤仕		北條臺左衛門時習	先手物頭	200	
356	94- 2	細野傳次郎	8代久貞時代に勤仕		細野七郎右衛門尚寛	大小性	100	
357	95- 1	阿部小太郎	8代久貞時代に勤仕		阿部玄令玄達	手医師		⑮
358	95- 2	岡 良博	8代久貞時代に勤仕		岡良博為政	ヒ医師	100	
359	95- 3	森 文斎	8代久貞時代に勤仕		森甫庵正守	ヒ医師		⑮
360	95- 4	田仲平作	8代久貞時代に勤仕					
361	96- 1	小嶋松庵	8代久貞時代に勤仕		小嶋昌庵温	ヒ医師	230	
362	96- 2	杉崎彦三	8代久貞時代に勤仕					
363	96- 3	尾崎源右衛門	8代久貞時代に勤仕	享和2年出奔				
364	96- 4	朝倉左十郎	8代久貞時代に勤仕					
365	97- 1	原 小弥太	8代久貞時代に勤仕	天保4年孫士官召放坊主	原亀次郎	中小性		55④
366	97- 2	石塚宗通	8代久貞時代に勤仕	天保2年倅格式召放坊主	石塚宗通好之	中小性		45④

367	98- 1	山田玄忠	8代久貞時代に勤仕	寛政8年出奔	山田玄忠玄賛	手医師	100	
368	98- 2	二宮玄壽	8代久貞時代に勤仕		二宮宗伯勝正	小普請		40④
369	98- 3	黒岡勘次郎	8代久貞時代に勤仕					
370	99- 1	大島圭斎	8代久貞時代に勤仕		大島桂斎孝彝	手医師		⑮
371	99- 2	伊藤 匡	8代久貞時代に勤仕					
372	99- 3	森 仲英	8代久貞時代に勤仕	文政2年士官召放坊主	森幸甫燠	匕医師		50④
373	99- 4	唐橋半三郎	8代久貞時代に勤仕		唐橋良俊	手医師並	150	
374	99- 5	島村藤助	8代久貞時代に勤仕		島村三郎兵衛邦彦	目付	100	
375	100- 1	坂部安五郎	9代久持時代に勤仕					
376	100- 2	羽倉重次郎	9代久持時代に勤仕		羽倉東之助惟得	高身役		75④
377	100- 3	福原敬八	9代久持時代に勤仕	文政3年切腹断絶	福原秋蔵重則	中小性		50④
378	100- 4	完倉八右衛門	9代久持時代に勤仕					
379	101- 1	藤井卯八郎	不明		藤井	小性・納戸役		55④
380	101- 2	池永半八	不明		池永半八廣重	中小性		45④
381	101- 3	衛藤近蔵	不明					
382	101- 4	植山仁右衛門	不明	文政5年次男士官召放坊主				
383	101- 5	高井時三郎	不明					
384	102- 1	角井鉛三郎	10代久貴の御供		角井藤馬俊教	目付格		⑮
385	102- 2	小澤八十次郎	10代久貴の御供					
386	103- 1	戸倉雅亮	10代久貴時代に勤仕					
387	103- 2	石川万右衛門	10代久貴時代に勤仕	文化7年御暇	石川万右衛門正俗	中小性		55④
388	103- 3	西山熊次郎	10代久貴時代に勤仕					
389	104- 1	植村宗肅	10代久貴時代に勤仕					
390	104- 2	松山立伯	10代久貴時代に勤仕					
391					安住住作義質	大小性		50④

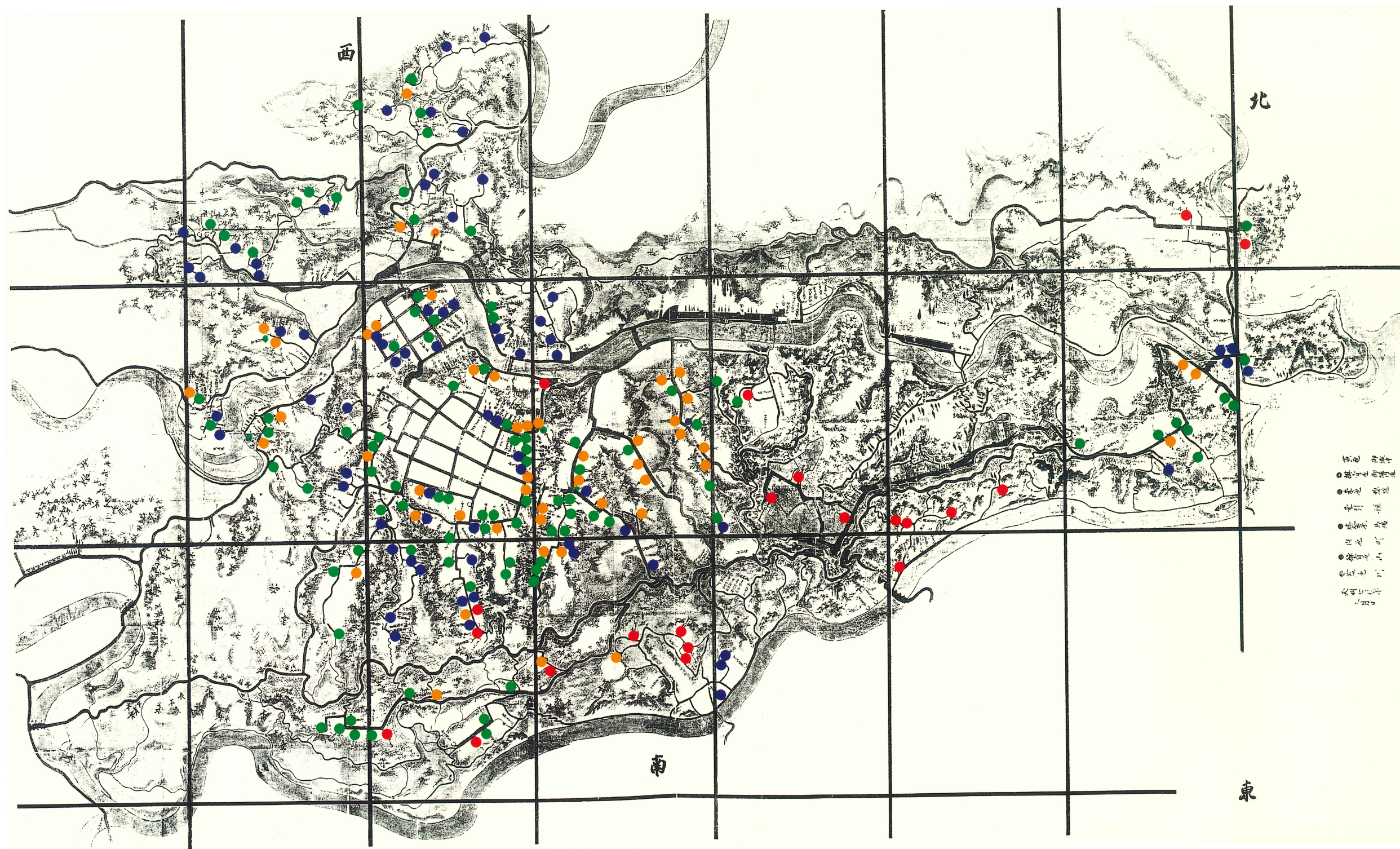
(注) 知行欄は、知行高を示し、「250」とあれば250石をあらわしている。

禄欄は、扶持米高・切米高を示し、「⑮」とあれば十八人扶持、「50④」とあれば50俵四人扶持、「100」とあれば100俵をあらわしている。

第4表 嘉永2年の岡藩諸職

○御家老 (7)	中川主馬 中川民部 中川平右衛門 中川靱負 中川頼母 井上主水左衛門 中川蔵主 中川但見	
○御城代 (0)		
○御年寄 (2)	長谷川武右衛門 赤座弥六郎	
○大小姓番頭 (3)	古沢九郎右衛門 大河原広右衛門 横田藤右衛門	
○中小姓番頭 (2)	安威右近右衛門 市浦菊助	
○奉行職 (0)		
○御用人 (13)		○江戸浮番 (2)
○御近習物頭 (14)		○中川靱負番 (10)
○江戸御留守居 (7)		○中川平右衛門番 (11)
○御先手物頭 (24)		○浮番 (11)
○組頭 (16)		○中川頼母番 (9)
○高身役 (32)		○組外馬廻 (1)
○御使番 (6)		○六組末席 (0)
○大坂御留守居 (0)		○御本丸御留守居組 (0)
○郡奉行 (0)		○小普請 (8)
○町奉行 (1)		御家老嫡子ヨリ御近習物頭惣領迄 (13)
○御勘定奉行 (0)		○御小納戸 (2)
○吟味役 (23)		○御小姓 (16)
江戸御留守居惣頭 (2)		○御ヒ医師 (9)
御先手物頭惣領 (10)		○御手医師 (4)
組頭惣領 (5)		御ヒ医師惣領 (3)
高身役惣領 (3)		○御手医師並 (14)
○古沢九郎右衛門番大小姓 (22)		○中小姓格茶道 (2)
大小姓惣領 (5)		○御絵師 (1)
御目付惣領 (7)		○茶道 (3)
○大河原広右衛門番大小姓 (23)		○御家老隠居 (9)
大小姓惣領 (7)		隠居被仰付候順席 (30)
御用人御近習物頭 (1)		御徒目付 (4)
○次入組外 (0)		御側徒士 (9)
○銀奉行 (3)		御番医師 (5)
○次入組外給人 (0)		御先徒士 (12)
○次入中小姓 (0)		御船頭 (3)
○横田藤右衛門仮支配中小姓 (20)		坊主 (13)
○市浦菊助番中小姓 (10)		小船頭 (1)
○安威右近右衛門番中小姓 (10)		座頭之頭 (1)
中小姓惣領 (1)		以下坊主 (17)
○御城代組中小姓 (4)		御城代組以下坊主 (4)
○中川主馬番 (10)		以下坊主御料理人 (1)
○中川平右衛門仮番 (7)		
○組外 (6)		

(「岡藩役名記」より)



第5図 「岡城城下家中図」(天明7年)に見る武家屋敷

- 凡 例 —
- 1000石～
 - 200石～
 - ～200石
 - 扶持米取・切米取